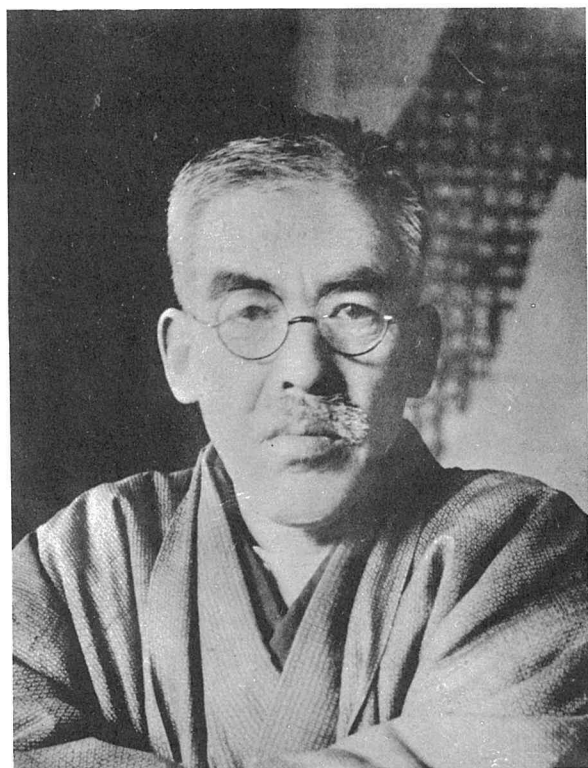


故 文學博士 今西 龍君 肖像



●喜田文學博士還曆祝賀式

京都帝國大學文學部講師兼東北大學法文學部講師文學博士喜



田貞吉氏は昨年華甲の壽を迎へられたに就いてその奉職せられる兩大學を中心に、門下知友等の間には豫て記念事業の計畫が進められてゐたが諸方面の賛同をえて最近ほどその豫定の諸事項を達成したので、去る四月十六日夕刻京都帝國大學本部樓上

に於いて盛大な祝賀式が催ふされた。當日博士は令息並に令姪を同伴、定刻前より來會せられ一般來賓また陸續として參集、式は五時三十分京都大學名譽教授小川琢治博士司會の下に開會された。まづ司會者の挨拶、會務報告(西田直二郎博士)の後中村直勝氏記念事業會を代表して會員五五七名の醸出になる記念品目錄を贈呈し、次いで梅原末治氏は喜田博士の令息三五畫伯の筆にかゝる博士の肖像油繪一面を京都大學國史研究室に寄贈し之を正面案上に掲げた。次いで京都大學文學部長濱田耕作博士以下東北大學法文學部長中村善太郎氏(牧健一氏代讀)日本歴史地理學會(梅原末治氏代讀)受業生總代廣島文理科大學教授清原貞雄博士等の祝辭並に東京帝國大學文學部長宇野哲人氏以下各地よりの祝電十數通の披露あり、最後に喜田博士立つて鄭重なる謝辭を述べられ式を閉じた。小憩の後席を別室に移して午後七時半かな晩餐會が開かれ、座長小川博士の發唱によつて一同博士の健康のために杯を乾した。デザートコースに入つては石橋五郎氏始め博士の知友同僚門下等交々立つて博士の逸事想ひ出等を述べ博士また之に對へて主客共に歡を盡し九時宴を閉じた。因に當日の來會者は約七十名であつた。左に京都大學文學部長の祝辭を載せる。(寫眞は博士肖像油繪)

祝詞

本日茲ニ喜田博士還曆祝賀式ノ舉行セラレマスニ當ツテ京都帝國大學文學部ヲ代表シテ一言御喜ノ御挨拶ヲ申述べ度存ツマス。博士ハ明治二十九年七月東京帝國大學國史科ヲ卒業セ

ラレテ後、文部省ニ入ツテ編輯ニ任ヅ、國史教育ノタメニ盡サレ、傍ラ東京帝國大學文科大學ニ於テ講師ヲ囑託セラレ、日本歴史地理ニ關スル講義ヲセラレマシタガ、明治四十一年二月始メテ本學文科大學ニ講師トシテ來任セラレ、爾來連年古代史並ニ歴史地理ヲ講セラレ、大正九年七月以後ハ教授ニ任ジテ國史學第一講座ヲ擔當セラル、コト滿五年ニ及ビマシタ。教授ノ職ヲ辭セラレテカラ後モナホ講師トシテ引續キ今日ニ至ツテ講義ヲ願ツテキルノデアリマフ。其間通ジテ凡ソ二十五年我が文學部ノ歴史ト殆ドソノ年數ヲ等シクスルノデアリマス。

博士ハソノ學極メテ該博常ニ一家ノ見ヲ持シ、往々世俗ノ通説ヲ斥ケ前人未發ノ學說ヲ提唱シ椽大ノ史筆ヲ揮ツテ謬々ノ議論ヲ物サレ、我が國史界ニ異彩ヲ放タレツ、アツタコトハ今更申スマデモナイ所デアリマス。今日マデ發表セラレタ論文ハ實ニ四百有餘編ノ多キニ及ンテ居ルノデアリマス。コノ事ヲ以テシテモ博士ノ功業ト其ノ精力ノ非凡ナルヲ見ルベキデアリマセウ。更ニ博士ハ早ク史蹟ノ實査ヲ重要視セラレ、博士自身ノ足跡ハ殆ド全國ニ及ンデキルノデアリマス。カクテ所在ノ考古學的遺跡を探リ、遺品を求メ或ハ土俗ヲ蒐集シ以テソノ專攻トスル我日本民族ノ成立並ニソノ發展ノ過程ヲ明カニセントセラレタノデアリマス。尙博士ニ就イテ特ニ申上ケベキハ博士が嘗ニ大學ナドノ講壇ニ後進ヲ誘掖スルニ止マラズ、進ンテ所謂街頭ニ出テ、モ講筵ヲ張り國史ノ智識ヲ

普及スルコトニモ努メラレタコトデアリマス。

博士ハ老來愈々頑健、壯時日本歴史地理學會ヲ創設セラレタル意氣ヲ以テ、近年東北地方文化ノ研究ニ志シ、コレニ學生ノ力ヲ傾ケテ我民族ノ古代生活ノ究明ニ當ツテ居ラレルノデアリマス。本年御還曆ニ際シ博士ノ鬢髮ヤ、白キヲ加ヘタカニ見エルノデアリマスガ、其意ニ於テハ少シモ衰ヘナイノデアリマス。冀クハ今後愈々攻學ニ專ラニ自重自愛以テ邦家ノ隆昌、學界ノ發展ニ貢獻セラル、コトノ多カランコトヲ熱望シテ止マナイノデアリマス。以上蕪辭ヲツラネテ博士ノ功績ヲ回想シ以テ本日ノ祝詞ニ代ヘントスルモノデアリマス。

昭和七年四月十六日

京都帝國大學文學部長 濱田 耕作

京都帝國大學教授兼京都帝國大學教授今西龍博士訃

京城帝國大學教授兼京都帝國大學教授正四位勳三等文學博士今西龍氏病遽かに革りて溘焉として逝去せらる。哀悼曷んぞ堪へむ。思へば五月十八日朝余等大學東洋史研究室に至りしに、前夜先生突如卒倒して帝大病院に入院せられし由を聞き驚愕措く所を知らず。急遽病院に馳せしに、主治醫は面會謝絶の揭示を以て先生の御病の篤きを知らしめぬ。先生今次の御病は再度の發作ときけば、この貼紙は痛く余等の胸を打ちしも、神慮恵を垂れて必ず御本復の期近き事を信ぜしに、藥物針石百方及ばず、十九日夕俄然惡化せられて遂に二十日夜十時五十五分終焉

の悲計に接す。噫悼しい哉。顧みれば先生は明治八年を以て岐阜縣揖斐郡池田村大字池野一二五番地に生る。幼にして郷黨倚輩に擯んで、後笈を負ひて仙臺に遊び更に東京帝大に學んで明治三十六年夏東大史學科を卒業せらる。直に大學院に入り朝鮮史を専攻せられ専ら坪井九馬三博士に師事して斯學の研鑽を積まれたり。後東大副手となり傍ら諸學校に教鞭をとられしが、大正二年に至つて京都帝國大學講師となり初めて我京大の教壇に立たれ、専ら朝鮮史及び考古學の講義を擔當せらる。初め先生は東京御在任の時より朝鮮史研究の傍ら考古學に興味を持たれその成果は或は人類學雜誌、考古學雜誌或は東洋學報等に珠玉となりて掲載せられ、又宮崎縣西都原古墳調査となりしが、やがて大正五年京大助教に任ぜられてよりは専ら朝鮮半島の史的研究を念とせられ、その文獻的研究に渾身の努力を捧げられたり。かくしてその成果は、或は藝文、史林に、或は東洋學報、史學雜誌に、又東洋時報等にあらはれて後進を誘拔せらる、事大に、殊に史林一巻一號に載せられし辰番郡在南方説は從來の在北方説に斷乎として反對されたる新説といふべく、先生の半島史研究の旗幟を鮮明にされしものにして、更にその前年藝文六年十一月に載せられたる朱蒙傳説及老獺傳説の研究は高句麗開國に就いて科學的批判を試みられしもの、その後の不斷の研鑽によつて後年學位を獲られし論文の基礎をなすものと聞く。茲に至つて先生の朝鮮古代史の檢討研究は日に増し月に進みて愈々極る所なく、新羅百濟高句麗に關する精緻なる研究論文續々

と世に公にせられ、半島史の權威の名譽は先生に冠せらるゝに至れり。かくて先生の名聲のいよゝ／＼舉るにつれて朝鮮總督府は半島史編纂の事務を囑託し、更に朝鮮古蹟調査委員に任命し權威ある朝鮮史の完成を先生に委し且半島に遺存せる古蹟の完全なる科學的調査を囑するに至りて、朝鮮史即先生、先生即朝鮮史なるの感を懐かしむるに至る。かくて大正五年度、大正六年度の古蹟調査報告となりて從來不明なりし史蹟の明かにせられ、詳細にせらるゝもの多數に及ぶと共に、先生の研鑽いよ／＼微に入り細に互り而も大綱を離れずして進み、大正十一年六月に至つて文學博士の學位を獲得せられ、次いでその研究を更に完璧ならしめんが爲に在外研究の命を拜して同年秋支那に赴かれ、又英佛に遊んで歸朝せらる。その間朝鮮史關係の史料文獻を只管に蒐集さるゝと共に、老齡をかへりみず滿洲語の學習を始められしは後進學徒の範とすべき所、その滿洲語に關する造詣は後年の「滿洲語のはなし」なる冊子となつて學徒を裨益する所大なり。尙又、支那にありては碩學柯鳳蓀先生の門客に列して堂々東邦史に關して意見を交換せられ、泰西に在りては英佛の諸學者と交驩せられたり。茲に於て、朝鮮史家としての先生の名聲字内に冠たり。在外二年の御研究を一轉機として朝鮮は遂に先生を同地に迎ふる事となり、朝鮮史編輯會委員とならるゝと共にやがて京城大學の設立せらるゝや朝鮮史學第一人者として聘せられて同學教授となり兼ねて京都帝大に教授となり、親しく半島の地に赴かれて檢討聲價益々揚り朝鮮史の科學

的研究いよ／＼茲に確立す。然るに不幸にも昭和四年初頭二整の犯す所となられ、一意擁護これ努めて御本復されしは實に斯學の爲慶實にたへざりし所、本年に入つては久方に我京大の學壇に立ちその蘊蓄を傾けて講授せらるゝの喜びを得たるに、再不幸にも突如宿痼の再發さるゝ所となりて遂に手足を啓かるゝに至る。享年五十有八、洵に痛惜にたへず。事天聽に違するや畏くも位一級を進めて正四位に叙せらる。蓋し先生は御一生を半島史の研究に捧げられしものにて殆んど未開拓に近かりし朝鮮史をよく開拓し、或は犀利なる史眼による史的批判、汗牛充棟も嘗ならざる論文の發表、或は基礎的文獻の整理刊行によつて以て確固たる半島史の完成を促進されしその功や千古に輝き永劫に没すべからず。

越えて二十一日午後四時より洛中富小路二條下ル願照寺にて終焉の儀式を執行せられ、東伏見伯、京城大學總長山田三良博士、京城大學法文學部教官、京都帝大文學部教官、京都帝大文學部學友會、京大史學科受業生、岩井武俊氏、京都アバート等より供へられたる約三十基の花環、生花、橘、果物等は莊嚴に一段の光彩を添へ、先生の聲望の如何に高かりしかを想はしめ哀愁痛惜の懷一入心胸に切なるものあり。讀經の後京城大學山田總長、京城大學法文學部教官總代島山喜一教授、京都帝大文學部長濱田耕作博士、京大史學科受業生總代鴛淵一學士の弔詞あり。喪主春秋君以下遺族親族の燒香につぎて東伏見伯、山田博士、京都帝大總長新城新藏博士、島山教授、濱田博士、友人總

代龜田次郎氏、受業生總代小川茂樹、外山軍治二氏等の禮拜あり、引續き一般知友門下の告別禮拜にうつり、會葬者二百餘名そぞろに涙の袂をしばりたり。

かくて先生の御遺靈はそのまゝに御一門に護られて郷里池田村へ向はれ、越えて二十三日御本葬を營まれ京都大學よりは西田直二郎博士、梅原講師參列され、式典悼くも嚴かに執行されしと承る。茲に先生の履歴の大略、功績の一斑、及び終焉の大梗を記して謹みて先生の御逝去を悼む。尙濱田部長、受業生總代鴛淵學士の捧げたる弔詞左の如し。(鴛淵一謹記)

祭詞

維レ昭和七年五月二十一日京都帝國大學文學部長濱田耕作謹ミテ故京城帝國大學教授兼京都帝國大學教授文學博士今西龍君ノ靈ヲ祭り且之ニ告ケテ曰ク君ハ明治三十六年東京帝國大學文科大學史學科ヲ卒業シ大正元年吾カ京都帝國大學文科大學講師トナリ次テ助教授ニ任シ海外ニ遊ンテ後京城帝國大學教授ニ轉セルモナホ本學ノ教授ヲ兼ネ吾カ學部ノ教職ニ携ルコト前後二十年ヲ過ク君實生謙讓篤學夙ニ朝鮮史ノ研究ニ專念シ其ノ造詣比ヲ絶シ半島史學ノ權威トシテ内外君ヲ仰カサルモノナカリキ嚮ニ病ヲ獲テヨリ久シク本學ノ教壇君ヲ見ルコト能ハサリシカ今年再ヒ君ヲ迎ヘテ子弟其ノ該博深遠ノ講述ニ參スルコトヲ欣ヒタリシニ遽ニ簀ヲ易ヘ倏ニシテ幽明境ヲ異ニス驚愕悲悼洵ニ言フトコロヲ知ラス茲ニ奠ヲ設ケ哀ヲ舉ケ英靈ニ永訣ス嗟悲イ哉

昭和七年五月二十一日

京都帝國大學文學部部長 濱田 耕作

甲 辭

去ル十七日恩師 今西先生我カ文學部史學科ニ於ル授業ヲ了ヘテ客舎ニアリ偶々宿病ノ犯ス所トナラル生等皆テ先生ノ講述ニ待スコノ報ヲ得テ驚愕措ク所ヲ知ラス只管御本復ノ亟カナランコトヲ祈ル焉ソ圖ラン兩三日ヲ出テスシテ悲計ニ接セントハ生等先日機會ヲ得テ齊ク先生ノ醫咳ニ接ス温容眼底ニ在リ今茲ニ法境永訣ノ式典ニ列ツテ感慨特ニ切ナルヲ覺ユ哀悼何ソ堪ヘンヤ 顧レハ明治三十六年先生東京帝國大學史學科ノ業ヲ卒ヘラレテヨリ爾來三十餘年天稟ノ才能ト非凡ノ識見トヲ以テ東洋史學殊ニ殆ント未開拓ニ近カリシ朝鮮史學ノ研鑽ニ精進セラレ先ニハ東都諸學校ニ次テ我カ京都帝國大學ニソノ蘊蓄ヲ傾倒シテ後進ヲ誘導セラレ後京城大學ノ設立セラレ、ヤ朝鮮史研究ノ權威トシテ聘セラレ親シク其ノ地ニツキテ研究ノ成果益々上リ先生年々ノ入洛講授ハ生等常ニ鶴首待望スル所ナリキ實ニ朝鮮史研究ノ進進ハ先生不斷ノ努力ニ負フ所大ナルハ言フ俟タサル所殊ニ其ノ基礎的諸文獻ノ整理刊行ハ炳トシテ千古ニ耀キ先生ノ名聲ヲ永劫ニ傳ルモノト云フヘシ而シテ先生ノ生等ニ臨マルルヤ談博ナル知識周到ナル用意熱烈ナル意氣ヲ以テ新學說ノ講授ニ努力セラレ又常ニ慈父ノ情愛ヲ以テ生等ノ身上ニツキテ親シク心ヲ勞セラルルコト到ラサルナシ今俄ニ幽明境ヲ異ニス殘恨胸ニ充テ悲痛極リナシ冀クハ英靈長ヘニ安ラケク生等ニ

第十七卷 第三號 五二二

加護ヲ垂レ給ハンコトヲ 謹ミテ蕪辭ヲ陳ネテ弔詞ト爲ス

昭和七年五月二十一日

京都帝國大學文學部史學科

受業生總代 鴛淵 一

故今西龍博士略歴

明治八年八月十五日 岐阜縣揖斐郡池田村大字池野一二番地ニ生ル

同 三十六年 七月 東京帝國大學文科大學史學科卒業

同 九月 同上 大學院入學、朝鮮史專攻(四十一年七月迄在學)

同 四十一年六月二十四日 同上 副手ヲ囑託ス

同 四十二年一月二十三日 燃藜室記述調査補助ヲ囑託ス

同 四十四年六月三十日 東京帝國大學文科大學列品室教務補助ヲ囑託ス

同 四十五年四月三十日 同上 解囑

大正二年三月三十一日 依願東京帝國大學文科大學副手囑託ヲ解ク

同 同 京都帝國大學文科大學講師ヲ囑託ス(朝鮮史)

同 五月十五日 考古學教室ニ屬スル物品監守者ヲ命ズ

同 十一月八日 考古學教室公用圖書借受者ヲ命ズ

同 五年一月二十一日 任京都帝國大學助教

叙高等官六等

同 二月二十一日 叙正七位

同 二月二十五日 朝鮮總督府ヨリ朝鮮半島史編纂ニ關スル事務ヲ囑託セラル

同 五年四月二十六日 朝鮮總督府古蹟調査委員任命

同 六月二十八日 京都帝國大學文科大學考古學教室ニ屬スル物品監守者ヲ免ズ

同 七年二月十二日 陞叙高等官五等

同 三月十一日 叙從六位

同 八年四月一日 官制改正ニ付辭令ヲ用ヒズ京都帝國大學助教授ニ移リ文學部勤務トナル

同 九年二月二十三日 陞叙高等官四等

同 四月十日 叙正六位

同 十一年三月四日 陞叙高等官三等

同 四月十日 叙從五位

同 六月七日 文學博士ノ學位ヲ授與セラル

同 六月二十三日 朝鮮史研究ノ爲滿二年間支那へ在留ヲ命ズ

同 九月十五日 在外研究ノ爲出發

同 十月十六日 英吉利國ヲ在留國ニ追加ス

同 十三年十二月二十四日 在外研究ヲ了リテ歸朝

同 十四年七月二十日 朝鮮史編輯會委員被仰付

同 十五年五月七日 任京城帝國大學教授兼任京都帝國大學教

授叙高等官三等

同 八月二十三日 陞叙高等官二等(本兼兩官ニ對シ)

同 十月十五日 叙正五位

昭和三三年十一月十六日 昭和三三年勅令第百八十八號ノ旨ニ依リ大禮記念章ヲ授與セラル

同 六年九月十五日 陞叙高等官一等

同 十一月二日 叙從四位

同 十一月七日 叙勳三等授瑞寶章

同 七年五月二十日 午後十時五十五分逝去

叙正四位 特旨ヲ以テ位一級追陞セラル

故今西博士著作目錄 自明治三十五年七月至昭和七年五月

一、單行本

(書名) (發行年月)

檀君考(青邱說叢卷一) 昭和四年六月

滿洲語のばなし(同卷二) 昭和六年一月

二、論文

(題目) (掲載雜誌)

美濃の國採斐那片山附近の古墳

東京人類學雜誌一七卷一九六號

神生貝塚記事(一―四回)

二卷二三九號

朝鮮にて發見せる貝塚に就て

同 二卷二四〇號

金海貝塚の所在地土木硯に就て 同 二六〇號

新羅時代の土器に彫刻せる神話 同 二六二號

新羅舊都慶州附近の古墳 歴史地理 一一卷ノ一號

朝鮮にて發見せる曲玉及金環等 東京人類學雜誌二三卷二六四號

慶州に於ける新羅の墳墓及び其遺物に就いて(第一回、未完) 同 二三卷二六九號

朝鮮半島の年號事大主義一斑 東洋時報 一四三號

檀君の説話に就て 歴史地理 朝鮮號

慶州の地勢及び其遺跡遺物 東洋學報 一卷 一號

正豐峻豐等の年號 同 同

壽隆の年號に就て故平子尙氏の所説を紹介す 考古學雜誌 一卷 十號

祝部土器の接合について 東京人類學雜誌二七卷 七號

大同江南の古墳と樂浪王氏との關係 東洋學報 二卷 一號

百濟國都漢山考 史學雜誌 二三卷一號

新羅僧道説に就て 東洋學報 二卷 二號

高麗の年號光徳の年代(高麗史紀年に錯誤あるの疑) 考古學雜誌 三卷 一號

朝鮮に於ける國王在位の稱元法 東洋學報 二卷 三號

光徳年代考補 考古學雜誌 三卷 三號

西部原塚及一本松塚 同 三卷 九號

但馬國城崎郡氣比の銅鐸發見地 同 四卷 三號

朝鮮書籍解題 東洋時報 一九〇號 一九一號 一九二號 一九三號

一九四號 二〇四號 二〇五號 二〇六號

李朝の實録に就て上・下 二〇八號 二〇九號 二一一號 二一四號

同 藝文 五年 八號 同 九號

〔西部原〕第十一號塚 宮崎縣西部原古墳調査報告

〔同〕第二十一號塚 制勝方略解題 東洋時報 二〇〇號

金寛谷及其著書に就て 同 二〇一號

王氏高麗朝に於ける修史に就いて 藝文 六年七號

朱蒙傳説及老獺種傳説 同 六年十一號

日本朝鮮の交通に關する臆録に就いて

史學雜誌 二六卷十二號

眞番郡考 史 林 一卷 一號

朝鮮史の葉 同 一卷三號、四號

同 二卷一、二、三、四號

京畿道楊州郡佛巖山城址及佛巖寺調査報告書

大正五年度古蹟調査報告 朝鮮總督府

京畿道高陽郡北漢山遺蹟調査報告書 同

京畿道廣州郡利川郡鹽州郡楊州郡高陽郡加平郡楊平郡長湍郡開城郡江華郡黃海道平山郡遺蹟遺物調査報告書 同

高麗諸陵墓調査報告書

任那に就て

西都原古蹟調査報告(内藤博士と合著)

朝鮮白丁考

朝鮮李太王三年丙寅天主教徒虐殺記事

朝鮮慶州栢栗寺六面石幢刻文

海東高僧傳に就きて

高麗太祖訓要十條に就きて

新羅崔致遠傳

新羅殊異傳及其逸文

加羅疆域考

同 補遺

慶尙北道善山郡達城郡高靈郡星州郡金泉郡慶尙南道咸安郡昌寧郡調査報告 大正六年度古蹟調査報告書 朝鮮總督府李

氏朝鮮の學風の變遷

百衲本史記の朝鮮傳に就きて

高句麗五族五部考

新羅文武王陵碑に就きて

百濟五方五部考 上・下

新羅眞興王巡狩管境碑考

新羅骨品考

朝鮮叢報

宮崎縣史蹟調査報告 第三册

藝文 九年 四號

歴史と地理 一卷 六號

考古學雜誌 八卷 十一號

史林 三卷 三號

東洋學報 八卷 三號

歴史と地理 二卷 六號

藝文 一〇年三號

史林 四卷 三號四號

同 五卷 一號

支那學 一卷 五號

藝文 一二年三號

史林 六卷 三號

藝文 一二年七號

同 同八號、十一號

考古學雜誌 十二卷一號三號十一號

史林 七卷 一號

新羅葛文王考

箕子朝鮮傳說考

己汝伴跋考

支那の一古墳に就きて

滿洲語に就きて

列水考 京城大學法文學會編

東國輿地勝覽に就いて(第一回、未完)

濟州風土記(譯本)

水清き論山郡仁川里

月印千江文曲と釋譜詳節とに就て

尊經閣叢刊「拙藝千百」に就きて

鐵原の名勝地孤石亭

(右先生の著作目録は若卒の際に蒐録したるを以て逸落甚だ多かるべく又批評、紹介、及び解説の類を凡て省略に附せしは先生の靈に對し恐縮の至りなれど、この際未定稿のまゝに出す事とし他日諸賢の御援助により補正せん事を期す。尙右目録作製に際して梅原末治氏の御助力を得たる事を茲に感謝す。鴛淵、内田記)

藝文 一三年五號

支那學 二卷十號十一號

史林 七卷 四號

考古學雜誌 一三卷九號

支那問題 二十八號

朝鮮支那文化の研究

朝鮮學報 一卷 一號

朝鮮學報 一卷 二號

朝鮮 一八四號

朝鮮 一八五號

朝鮮 一八八號

朝鮮 二〇四號

● 京師帝國大學 國史專攻學生 越前地方研究旅行記

五月の新的綠香に誘はれて、西田教授指導の下に二十七名の一行は遠き昔の跡を平泉寺、福井、大聖寺、吉崎、武生、敦賀

等に訪れて、國史研究上の資を探りつゝ、相互の親睦をほかつた。六日の深夜京都を出發し、安らかな眠りをむすぶ暇もなく七日朝早く福井に着き小憩後間もなく大野行の電車に乗る。車窓にうつる北國の春景色に旅行気分を味ひつゝ、勝山に着き、自動車平泉寺跡に驅る。平泉寺は養老年間に僧泰澄の開基する所で、源平の昔から僧兵蟻居し、戰國の頃には堂社坊宇の雄大を見たが、明治に入り神佛合祀が禁ぜられ僧房は廢せられて白山神社として僅かに面影を残してゐる。石燈の道に沿うて行く事十町許りで左手に寶物館を見出す。寶物百餘點の中平泉寺古圖朝倉義景の文書等見るべきがあり、こゝを出て境内の老杉青苔を賞しつゝ、寛正七年建立の白山妙理大權現に至る。最近他より移された古い奉納面十餘個を拜觀したがその中の裏面に、

「寛永十八辛巳稔卯月五日松平大和守願望成就」

「慶長九年極月日秀康奉納」

「寛文十年五月」

と書かれたものなどがあつて興味をひいた。更に舊玄成院庭園の幽雅を賞した。時間迫るまゝに平泉寺に別れを告げて福井に歸り、自動車を別格官幣社藤島神社へ走らせる。社は義貞戦死の地燈明寺殿から牧の島村に遷され、明治三十四年現地足羽山の中腹に遷されたものである。明暦三年に燈明寺殿から掘出された新田公御兜、及び結城公御書簡、脇屋公御太刀と傳ふるものを拜觀する事が出来た。次に淨得寺では狩野永徳描く所と云ふ世界地圖、日本地圖の六枚折の一、双の屏風を珍らしく觀た。

時間の都合で眞宗寺を割愛して汽車で大聖寺へ向つたのは正午少し過ぎであつた。大聖寺なる惠稱寺では親鸞繪傳四福(寶徳元年十一月二十八日本願寺第八世存如上人筆)顯如上人消息、六日講御書(八通)等を研究した。同寺から二里程で吉崎に着く文明三年七月から同七年九月まで蓮如上人の駐錫した地で、東西別院があり、その背後の丘上に蓮如上人時代の御堂の跡がある。先づ東別院願慶寺を訪ふ。延寶年間山上公訴の結果山上は公地となり享保六年願慶寺をそのまゝ、本願寺掛所として勅願所吉崎御坊と稱したもので現在は大谷派別院として存し、本堂は延享四年の修築に倣り、本尊は一尺一寸の方便法身尊像(安阿彌作と傳ふ)で、蓮如上人像、六字九字十字三幅對之名號三軸紺紙金泥三部妙典四卷(見玉尼筆)、嫁威肉附之面等の寶物に接した。西別院西念寺は延寶年間山上公訴の結果享保年中現地に道場が開かれ、現在の本堂は寛政九年の建築である。蓮如上人眞影や西念寺の嫁威肉附之面等が示された。同處は眼下に大聖川の海に注ぐあたり、北瀉の碧水を望む景勝の地であり時間の乏しいのが残念であつた。此處から自動車に揺られ、て芦原三國を經、東尋坊の奇勝を訪うた。峻壁屹立する事數十尺、紺碧の潭深く、寄せてはかへず磯波が岩に碎けて白いしぶきをあげて居り、その碧潭に潜水する海女の勇壯且つ優美な壯景は異郷情緒を豊かに味はせてくれた。漂茫たる日本海に夕日の傾く頃東尋坊を後にして芦原に歸り、温泉にひたつて旅の疲れを慰めて一泊した。

八日朝九時頃蘆原を後にし、金津では汽車の延着を待つ間に農園を訪れたが、この頃から漸く降り始めた雨は旅行の前途に一抹の暗影を投じた。豫定より少し遅れて武生に着き、天台宗眞盛派に屬する引接寺で晝食を攝り、往生要集(九冊、粘葉綴で製本術から見ても優秀なものであり、鎌倉時代の氣分をよく表はし重々しいところがない。竪五寸九分、横三寸三分、六行十五字で、上の註記も假名も鎌倉時代のものである。十念名號(眞盛上人筆)、眞盛上人消息、六字名號(眞盛上人筆、身代の名號といふ。竪九寸、横三寸)、二十五菩薩名號(長享三年、眞盛上人筆)等の珍藏に接した。

武生から汽車で敦賀に至り、先づ官幣大社氣比神宮を訪ふ。朱の大鳥居は正保二年の建立で兩部鳥居の形式を探り、本殿は慶長十九年の建立で行梁には桃の實を眞二つに割つて劍を持して現はれたる桃太郎の彫刻があり桃山時代の藝術の香を偲ばせる。暫時古文書を研究して官幣中社金崎宮に至る。社は延元元年勅王の土氣比氏治が築城して籠り、元龜元年初倉景恒が據つて信長に抗した金崎城の跡にあり、明治二十六年尊良親王を奉祀して官幣社に列せられた。社の西北、海中に斗出せる月見崎から春雨にけむる敦賀灣を展望して後、和漢朗詠集の古寫本及び附近から出土した經筒等を觀て此處を辭した。雨の松原公園の勝景に嘆美の聲を放ち、武田耕雲齋の墓に詣で、間もなく自動車を手を捨て、田舎道を西福寺へと歩みを運んだ。古寫經(天平十二年五月一日記)、授手印(元亨二年良曉寫)、淨觀法名(應永

十三年、竪九寸五分、横一尺四寸)、一枚起請文(黒谷にて天正十年寫す)、主夜神像(宋畫)、當麻曼陀羅(惠心筆と傳ふ)、光明本章(三菩薩、竪二尺七寸六分、横一尺一寸七分)等多く見るべきものに接した。植木樓別荘で夕食を攝り、八時頃敦賀を後にし十一時半頃京都驛に解散して旅行の幕を閉じた。(渡部)

●京都帝國大學文學部史學科本學年講義題目

○國史

普通講義

國史概説(第一部)

西田 教授

4 毎週

國史概説(第二部)

辻 講師(第一、二學期三十時間)

特殊講義

文化史研究の方法及問題

西田 教授

2

朝鮮史

今西 教授(第一學期三十時間)

日本古文書學

中村助教授

2

日本法制史

牧 講師

2

日本歴史地理

喜田 講師(第三學期二十時間)

最近日歐外交史

大塚 講師(第二學期三十時間)

演習

日本社會史の諸問題

西田 教授

2

○東洋史

普通講義

東洋史概説(第一部)

羽田 教授

2

東洋史概説(第一部) 和田 講師(第一、二學期三十時間)

特殊講義

○史學研究法 普通講義

東西交通史

羽田 教授

2

史學研究法

原(隨)助教授 1

朝鮮史

今西 教授

(第一學期三十時間)

歷史哲學序説

田邊教授(第三學期) 4

明代の滿洲

鴛淵 講師

2

○地理學 普通講義

石橋 教授

宋代の制度

宮崎 講師

2

人文地理學概説

中村(新)教授

演習

羽田 教授

2

自然地理學概説

石橋 教授

東洋史の諸問題

羽田 教授

2

特殊講義

石橋 教授

○西洋史

普通講義

政治地理學の問題

小牧 助教授

西洋史概説(第一部)

原(隨)助教授

2

滿洲蒙古地誌

石橋 教授

西洋史概説(十七世紀以降)(第二部)

時野谷助教授

2

内外地誌演習

石橋 教授

特殊講義

濱田 教授

2

實習

石橋 教授

エーゲ海地方の文化

原(隨)助教授

1

○考古學 普通講義

濱田 教授

デモステネスと其時代

時野谷助教授

2

考古學概論

濱田 教授

獨佛職役の研究

鈴木 講師

2

特殊講義

濱田 教授

中世西歐社會の成立

原(隨)助教授

1

エーゲ海地方の文化

濱田 教授

演習

時野谷助教授

1

東亞古代美術

小牧 助教授

西洋史の諸問題

時野谷助教授

1

石器時代の研究

梅原 講師

Outks & Mowat : The Great European Treaties of the 19th Century.

講讀

1

スキタイ考古學

2

講讀

講讀

1

講讀

2

講讀

講讀

1

講讀

2

Walgelschichte, I. Abtheilung, Kaiser : Die Neuzeit bis 1789.

講讀

1

講讀

2

演習

考古學の諸問題

濱田教授

2

實習

考古學實習

梅原講師

東洋史專攻

室町時代の精神と趣味生活
近世經濟思想發展に關する一研究

徳永 職男
有働 賢造

唐宋時代の嶺南

藤澤 吟治

宋都開封汴京抗州臨安に於ける警察行政
消極政策時代に於ける漢對匈奴關係

萩野 端
伊地知正興

元朝歴代后妃考

腰高 清一

「九品中正」制度に就いて

増村 宏

戊戌の變法自強について

三國谷 宏

忙裕勒考

村上 嘉實

漢北民族と漢民族との中原爭奪の一例としての宋元の交戦に
就いて

野田不美男

天津教案の顛末

野村 政光

日清戦より英國の威海衛租借までの東亞に於ける外交關係

小川 裕人

明代の士風

曾田健二郎

唐の均田法について

上田敬一郎

西洋史

Tudor 朝殊に Elizabeth に於ける救貧問題について

清水 巖

カロリナ朝を中心として見たる自由民の俗地主隸屬の様相
について

松屋 友次

Templerorden に就いて

二宮 善夫

Karl der Grosse の治績に關する一考察

佐藤 賢

●京都帝國大學文學部史學科昭和六年度
卒業論文題目

國史專攻

京都に於ける徳川時代の自治制度に就いて

秋山 國三

藤原後期及び鎌倉初期に於ける淨土教思想の發展

福尾猛市郎

室町時代の集團運動

日澄彌三郎

平安末期の歴史思想について

金子 重雄

近世に於ける思想抗争に關する一考察

前田 一良

復古神道派に於ける尊皇愛國の精神

富田 爽美

文久元年露艦の對馬占據に關する外交史的研究

關津 正志

近世三教史の一研究(特に神道思想の發展を中心として)

野部 長養

近世初頭に於ける都市に關する考察

小川 勝

大鏡と愚管抄

末森 量

近世初期の學問

杉岡 憲一

近世黎明期に於ける時代思潮の一考察

鈴木 祥造

近世歌舞伎劇の精神と其の展開

田中 勝雄

近世封建制度社會の性質

谷口 忠夫

トーマス、ホッブスの國家學說とその歴史的背景 千手 正美
獨逸宗教改革前に於ける時代諷刺の性質に就いて 鹽見 高年

地理學專攻

越後の雪と住民

有川 秀則

西濃平野に於ける輪中の地理學的考察

別技 篤彦

大阪灣沿岸に於ける人口増減の地理的考察

海老原治三郎

秋吉臺の Kunst 景觀(石灰岩地方の地誌的研究)

織田 武雄

里部扇狀地の聚落に就て

櫻井 考矩

大阪灣諸港變遷の地理學的研究

武 政治

役牛移轉を中心として觀たる阿波に於ける農業地理の一特質

内田 秀雄

に就いて

岡山平野の開發(特に兒島灣を中心として)

渡邊 茂藏

●夏期講演會

京都帝國大學に於て各種學科普及の目的を以て、毎夏開催される恒例の夏期講演會(八月一日より十四日間)に於て行はれる史學關係の講演は左の通りである。

室町時代史—助教中村直勝氏、一日より六日迄、毎日午前

十時から十二時迄

△科外講演(毎夜午後七時から)

滿蒙の歴史について

教授 羽田 亨氏

一日

滿蒙の近代史に就いて

矢野仁一博士

二日

●西洋史讀書會

例會 鈴木成高講師並に二回生諸君歡迎會を兼ねて五月六日午後五時半より學生集會所にて開會、左の二君の講演あつて散會十時、出席者二十六名

一、ブルツクハルトの手紙

岡本 正藏君

一、Goetz: Renaissance u. Antike.

鈴木 成高君

例會 六月九日(水)午後六時半より樂友會館第一號室にて開催、左の二君の講演ありて散會十一時、出席者二十四名。

一、H. Cunow. Allgemeine Wirtschaftsgeschichte. Bd. I.

二回生 中山 治一君

一、Alfred von Martin, Soziologie der Renaissance.

鹽見 高年君

●東洋史談話會

例會 五月二十五日(水)午後六時半より樂友會館にて開催、左の題の下に講演を聴く。

一、慈恩三藏行傳に就て

宇都宮清吉氏

一、舒爾哈齊の死に就て

鴛淵 一氏

例會 六月九日(水)午後六時半より學生集會所乾室にて、宮

崎市定氏の

「上海駐軍中の感想談」を聴く

主として支那民家の構造に就いて實地に調査されたと事と小説

等に現はる、點とを併せて話さる。出席者二十五名。

●讀史會

例會 五月二十七日午後六時半より樂友會館第六號室に於て開催、西田教授牧教授以下四十五名參會、左の發表ありて十一時散會

京大卷子本三長記に就て

赤松 俊秀氏

時代區分の意味に就て

牧 健二氏

興福寺の雜學會

西田直二郎氏

會員談話(井川氏の源空上人畫像に就ての話等あり)。

●明治史研究會

第二十回例會 十二月十八日午後六時半より樂友會館に於て開催。西田教授以下十四名出席。左の講演あり十時半閉會。

明治初年の海運界

原 興作氏

明治法制史(第二回)

牧 健二氏

第二十一回例會 三月十日午後六時半より樂友會館にて開催。左の講演ありて十一時散會。出席者七名。

對馬事件に就て

福津 正志氏

第二十二回例會 五月二十三日午後六時半より樂友會館にて開催。牧教授以下二十六名出席。左の講演を終りて後幹事より本會解散の主旨を報告。發會以來五年本會はこゝに解散に決した。閉會十一時。

明治維新史の解釋について
國史上の三大革命

吉田 三郎氏
牧 健二氏

●民俗學會

例會 五月三日、學生集會所乾室にて七時より開會。會するもの西田教授以下三十數名。

一、Fraser の Mental Anthropology

池田 源太氏

一、民俗學の研究

西田直二郎氏

一、雜 觀

小牧 實繁氏

以上の如き講演をきく。吾々幼少なる民俗學徒の興味一方ならず、あまつさへ民俗學の將來の發展を吾々に暗示される所あつて益する所大なり。盛會裡に十時半閉會。

會 報

●寄贈交換圖書雜誌目錄

- | | |
|---------------|----------|
| 史學雜誌 四三の四、五、六 | 史學會 |
| 歷史地理 五九の四、五、六 | 日本歷史地理學會 |
| 信濃 四、五 | 信濃郷土研究會 |
| 考古學 三の二 | 東京考古學會 |
| 國立北平圖書館架 五の六 | 國立北平圖書館 |
| 國史學 十一 | 國史學會 |

大谷學報 十三の二

大谷學會

京都市上京區相國寺山内大光明寺

若松 榮三氏

經濟論叢 三四の六

京大經濟學會

京都市左京區北白川伊織町五六 久保方

佐藤 正義氏

史潮 二の一

大塚史學會

京都市左京區中飛鳥井町十の六

足利 淳氏

人類學雜誌 四七の三、四、五、六

東京人類學會

京都市左京區田中飛鳥井町十の六 佐々木方

大栗 傳三氏

考古學雜誌 二二の三、四、五、六

考古學會

(右紹介 島田員彦氏)

史學 十一の一

三田史學會

○退 會

史淵 三

九大史學會

榊 亮三郎氏

民俗學 四の三、四、五

民俗學會

○死 亡

史迹と美術 十七、十八、十九

史迹美術同攻會

今西 龍氏

國學院雜誌 三八の四、五、六

國學院大學

同郷士研究會

史跡名勝天然記念物 七の四、五、六

同保存協會

古典刊行會

怒佐布政呂

西宮市武庫郡神職會

三國史記 一部

西宮市武庫郡神職會

神社と史蹟

○會員動靜

○入 會

福岡市船津町一

川崎 正男氏

(右紹介 重松俊章氏)

三重縣飯南高等女學校

山本 英雄氏

(右紹介 有高巖氏)

京都市左京區下鴨板倉町七三

志賀 剛氏

(右紹介 西田直二郎氏)